

## 速報

屋久島国立公園のガイドの実態と役割—縄文杉ルートを事例として—<sup>\*1</sup>新井愛那<sup>\*2</sup>・枚田邦宏<sup>\*2</sup>・奥山洋一郎<sup>\*2</sup>

新井愛那・枚田邦宏・奥山洋一郎：屋久島国立公園のガイドの実態と役割—縄文杉ルートを事例として— 九州森林研究 70：49—52, 2017 ガイドには「利用者の行動の抑制や誘導ができる可能性」や「対象地の現況把握や維持管理の担い手としての可能性」があるとされており、国立公園の管理や利用の促進に対する役割が期待されている。そこで本研究では、屋久島国立公園の中で最も利用が集中し、また利用者の約半数がガイドを同行している縄文杉ルートで活動するガイドの実態を明らかにし、その役割を検討した。屋久島のガイド数は、1997年には約30名であったが2006年には193名と増加し、現在では約200名となっている。また、増加に伴ってガイドは個人ガイドとツアーガイドの2つに区分できるようになった。そして、個人ガイドかツアーガイドかによって混雑への対応が異なることが判明した。具体的には、個人ガイドは独自にグループの意向のみで行動し、混雑に対処できるが、ツアーガイドは自身のグループの意向のみで行動できず、混雑に対処することが難しいことが明らかになった。

キーワード：国立公園、ガイド、屋久島

## I. 研究の背景と目的

屋久島は、1989年に高速船が就航し、1993年に世界自然遺産に登録されたことなどから島への入込客数が増加した。最も多かったのは2007年の約39万5千人で、近年は減少傾向にあり、2015年は約27万3千人が来島している。また、入島客数の増加に伴い主要山岳地域の利用者数も増加し、最も多かったのは2008年の約10万9千人であった。近年はやや減少傾向にあり、2015年には約7万3千人になり、そのうちの82%が縄文杉ルートを訪れている（環境省屋久島自然保護官事務所、2015）（図-1）。このような利用者の増加により地域経済が活性化する一方で、山岳地域では利用者の増加に伴う様々な問題が発生している。このような問題は、人間が自然資源に影響を与えることによって生じる「物理的な問題」と混雑によって利用者の期待が阻害され、満足度が低下することによって生じる「心理的な問題」の2種類がある。物理的な問題には周辺水域の富栄養化や外来種の移入、ごみの放棄、し尿処理の許容量オーバー、植生破壊などがあげられ、心理的な問題には人が自然資源に影響を与えることを目にするによって生じる不快感や、多くの人の存在によって原生的な雰囲気を楽しめないなどがあげられる（山本、2006）。屋久島では、物理的な問題としてし尿処理の許容量オーバーや踏圧による裸地化の進行が生じており、これらに対して登山道の整備やトイレの増設、携帯トイレの普及、利用マナーの喚起などの対策が行われてきた。一方、心理的な問題として混雑が生じ、それによる利用者の満足度の低下が生じていると言われているが具体的な内容は明らかになっておらず、対策も進んでいない。また、屋久島町による利用調整の条例制定の試みがあったが、具体的な内容が明らかになっていないことや地元住民の合意を得られなかったことから条例案は可決されなかった。

しかし、心理的な問題を引き起こす混雑は、ある空間内の利用

密度に対する利用者の負の評価であると定義され、特に自然公園など野外レクリエーション空間における利用者の満足度を減少させる因子であり（愛甲、2003）、さらに利用者の満足度は利用体験の質を図る尺度であると考えられている（小林・愛甲、2008）。そのため、混雑によって利用者の満足度が低下すると観光の質の低下にも繋がり、さらには地域経済へも大きな影響を与える可能性が考えられる。屋久島の観光業は一部の島民の生活の基盤となっており、それを維持継続していくためには、混雑や利用目的等の現状を把握し、混雑と利用者の満足度の関係を明確にしなければならぬ。

そこで、2006年から環境省屋久島自然保護官事務所が実施している主要山岳部利用動向調査の結果から、屋久島の山岳地域の中で最も利用者数が多い縄文杉ルート（図-2）を対象に、混雑と利用者の満足度の関係を把握するための調査を2014年から2015年にかけて行った。その結果、利用者の増加に伴い混雑状況および利用者の混雑感は増加しているが、それによる満足度の低下は見られなかった。この要因の1つにガイドの同行が考えられた。分析の結果、ガイドを同行している利用者の方が「縄文杉を見る」と「ウィルソン株を見る」の2つの利用目的に対する満足度が高くなった。さらに、ガイドを同行している利用者の方が混雑による問題が発生している数も少なかった。この結果から、ガイドはガイディングなどのサービスによって満足度を高めている可能性と、混雑の緩和や回避といった行動をしている可能性が推測された<sup>1</sup>。

また、山岳地域のガイドに関する先行研究では、ガイドには「個人の環境配慮意識では行き届かない部分について、ガイドが案内することにより、利用者の行動の抑制や誘導ができる可能性がある」（山本・本郷、2006）や「インタープリテーションを通じた環境教育的側面や対象地の現況把握、維持管理の担い手としての可能性が指摘されるなど、ガイドには、観光業の発展はもと

<sup>\*1</sup> Arai, N., Hirata, K. and Okuyama, Y.: A study on the actual conditions and roles of guides in Yakushima-NationalPark : A case of Jomon-sugi trail.

<sup>\*2</sup> 鹿児島大学農学部 Fac. Agric., Kagoshima Univ., Kagoshima 890-0065, Japan.

より、その果たすべき役割が期待されている」(瀬戸口ほか、2004) などと言われており、このことからガイドは公園管理や利用の促進に対して重要な役割を持つ可能性が推測される。そこで本報告では、縄文杉ルートで活動するガイドの実態を明らかにし、考察においてその役割について検討する。

なお、本研究の調査対象となる屋久島のガイド、とりわけ縄文杉ルートで活動するガイドは、通常 mountain ガイドが行う「道案内」と「登山支援」の他に「屋久島の自然や文化の解説」を行っている。具体的には、動物や植物、歴史、世界遺産、国立公園、

山岳地域の維持管理の問題などの説明を行っている。中には「食事の提供」や自身の得意分野を活かしたサービス（「本格的な写真撮影の技術の指導」など）を行うガイドも存在する。ガイド料金はガイドによって異なり、縄文杉ルートの日帰りツアーで利用者1人あたり9,000円～30,000円であり、平均で15,000円となっている（屋久島公認ガイドウェブサイト）。また、2014年現在、縄文杉ルートを訪れる利用者の約半数がガイドを利用している（表-1）。

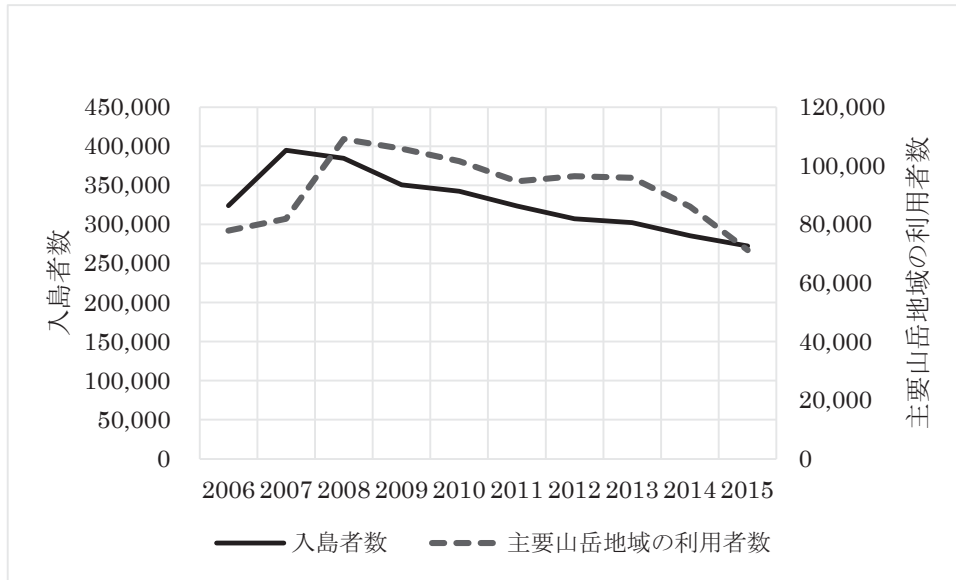


図-1. 入島者数と主要山岳地域の利用者数の推移  
出典：環境省屋久島自然保護官事務所（2006 - 2015）

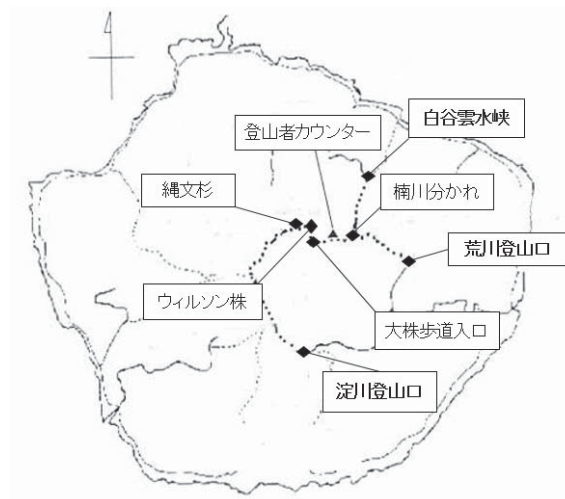


図-2. 縄文杉登山ルート地図

注) ……部分が主要登山口から縄文杉に至る登山道であり、縄文杉登山ルートは荒川登山口から縄文杉に至るルートを示す。  
出典：小林・愛甲（2008：66）に著者加筆

表-1. 月別の縄文杉ルートガイド利用率 (2014年)

月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	全体
ガイド利用率	47.9%	49.0%	51.8%	57.0%	51.9%	47.9%	50.0%	61.6%	56.3%	51.8%

注) 平成26年度山岳部利用対策協議会ガイド部会配布資料「縄文杉ガイド利用集計表 (H25,26)」より作成

## II. 研究の方法

始めに、屋久島のガイドに関する先行研究のレビューを行い、現在まで明らかにされている屋久島のガイドの実態を把握した。次に、先行研究では分からなかった2002年以降のガイドの実態について把握するために、ガイドの資格制度の実施を視野に入れ、屋久島のガイド業全体をとりまとめることを目的として2003年に発足した公益社団法人屋久島観光協会ガイド部会の会長であるM氏に対して、2015年12月に聞き取り調査を行った。また、認定制度等に関しては屋久島公認ガイドウェブサイトから情報を収集した。

## III. 調査結果

### 1. ガイドの実態

屋久島で登山ガイドが組織化されたのは1989年、現在の「自然や文化の説明」を行うガイドが登場したのは1993年のことである。1989年以前は、「道案内」や「登山支援」のみを行う登山ガイドが存在したが、ガイド業のみで生計を立てられるようなものではなかった。また、組織化せず個人で活動していた。1989年に高速船が就航したことにより観光客数が増加し始め、縄文杉や宮之浦岳へ行くことを目的とした登山ガイドの需要に応じて、個人の登山ガイドが増え始めた。また、団体客への対応と営業の効率化を目的として個人の登山ガイドが組織化し、「屋久島ガイド協会」が開設された(瀬戸口ほか, 2004)。その後、1993年に「自然や文化の説明」を行い、予め自身のウェブサイト等でコースおよびその内容を公表するガイドが登場した。1993年以降は世界自然遺産への登録により知名度が向上したことや、生計を立てられる職業として認識され始めたことから、登山ガイドと自然や文化の説明を行う現在のガイドを含んだガイド数は年々増加し、1997年には約30名、1999年には約60名、2002年には約80名に達した(瀬戸口ほか, 2004)。

2002年以降のガイドの実態については調査が行われていない

ため、2002年以降については聞き取り調査を行った。以降、聞き取り調査の結果を述べる。

2002年以降もガイド数は増加し、2006年には193名に達した。この急増の背景には、観光客数が増加し、普段登山をしない人が観光で山岳地域を利用することが増えたことによってガイドの需要が高まったことが考えられる。2006年以降は、ガイド数はあまり伸びず200名前後で推移している。この背景には近年の観光客数と主要山岳地域の利用者数の減少が考えられる(図-1)。

また、1999年までは個々のガイドが「道案内」や「自然や文化の解説」など自由に活動していた。しかし、ガイド数の増加に伴って対象地の競合や過剰利用、島外出身ガイドの対象地住民に対する配慮を欠いた行動などの問題が生じたことから、ガイドの質に関する水準の設定とその維持を行う必要が生じた(瀬戸口ほか, 2004)。そのため1999年以降、様々な研修や制度が実施されてきた。具体的には、講師を招いた勉強会や安全講習会、接客技術についての検討、登録・認定制度などである。特に、2008年に開始された「屋久島ガイド登録制度」においては、2016年11月現在、①屋久島ガイド心得、屋久島ルールへの同意、②賠償責任保険の契約、③救急法の受講、④公益財団法人屋久島環境文化財団が実施するガイドセミナーの受講、⑤屋久島町に2年以上居住、⑥屋久島ガイド2名が証明する2年以上の実務実績の6つの登録基準が設定されている(屋久島公認ガイドウェブサイト)。このような研修や制度の実施の結果、質の低いガイドは淘汰され、ガイドの質の水準は向上してきたと考えられる。

### 2. ガイドの分類

M氏へ行った聞き取り調査より、2015年12月時点で、屋久島では約200名のガイドが活動している。その内、縄文杉ルートで活動するガイドは約100名で、この内の8割はツアーガイド幹旋業者(以下、幹旋業者)に所属または契約しているガイド(以下、ツアーガイド)、残りの2割は幹旋業者に所属または契約をしていないガイド(以下、個人ガイド)である。この2つのガイドの混雑への対応は以下のように異なる。

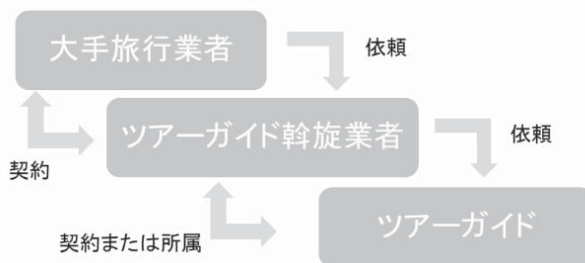


図-3. ツアーガイドとツアーガイド幹旋業者、大手旅行業者の関係図  
出典：聞き取り調査の結果より筆者作成

ツアーガイドが所属または契約している斡旋業者とは、大手旅行業者と契約を結んでいる会社を指す。ツアーガイドは、斡旋業者から客を割り当ててもらったことによって客を獲得している(図-3)。また、団体ツアーの担当になる場合があり、担当になると30名程の客を4名のガイドで引率し、山の中では4つの独立したグループで行動する。しかし、団体ツアーであるために同じ下山バスに乗りしなければならないため、下山時刻を合わせる必要がある。また、同じ団体および同じ斡旋業者のガイド同士は、事故などがあつた際に助け合わなければならない。そのため、同じ団体および同じ斡旋業者のガイドのグループの行動を無視して自分のグループの意向のみで行動することはできない。また混雑に対しても、自分のグループだけが早く進んだり、遅く進んだりするなど自由に対処することはできない。

一方、個人ガイドは斡旋業者に所属または契約せず、自身のウェブサイトやブログ、民宿への営業などで客を獲得している。個人ガイドはツアーガイドのように行動を共にしなければならないグループがない。そのため、自分のグループの意向のみで行動でき、混雑に対しても自分のグループの意向で早く進んだり、遅く進んだりするなど自由に対処することができる。

#### IV. まとめと考察

1999年以降、ガイドの質の向上やその維持が必要視され、様々な研修や登録・認定制度が実施されてきた。これにより、質の低いガイドは淘汰され、ガイドの質の水準は向上してきた。このことから、ガイドの質を向上させるために行われてきた研修等で培われたサービス内容(接客技術や知識など)が、利用者の満足度の向上に繋がることと予想される。

また、ガイドはツアーガイドと個人ガイドの2つに分類することができる。ツアーガイドは自分のグループの意向のみで行動できず、混雑に対しても自由に対処することができないが、個人ガイドは自分のグループの意向のみで行動でき、混雑に対しても自由に対処することができる。このことから、ツアーガイドと個人ガイドで混雑に対して行える行動やその程度が異なることが分かった。

今後の課題としては、屋久島国立公園の管理や利用の促進に対するガイドの役割をより明確にするために、満足度の向上に繋がっていると推測されるガイドが行うサービスの具体的な内容と、混雑に対する具体的な行動を把握し、またそれを利用者がどのように評価しているのかを把握する必要がある。

#### 謝辞

本研究は公益財団法人屋久島環境文化財団の「平成28年度屋久島生物多様性保全研究活動奨励事業」の研究成果の一部である。また調査において、ご協力いただきました皆様には心よりお礼申し上げます。

#### 引用文献

- 愛甲哲也(2003) 北大農研邦文紀要 25(1): 61-114.  
環境省屋久島自然保護官事務所(2006-2015) 屋久島主要山岳部 利用動向調査, 2 pp.  
小林昭裕・愛甲哲也(2008) 自然公園シリーズ2 利用者の行動と体験, 262 pp, 古今書院, 東京.  
瀬戸口真朗ほか(2004) ランドスケープ研究 67(5): 601-604.  
屋久島公認ガイド URL: <http://www.yakushima-eco.com/> (2016年11月15日利用).  
山本清龍(2006) 自然公園における利用者数が利用者の期待に及ぼす影響に関する研究(東京大学農学研究科学学位請求論文), 142 pp.  
山本清龍・本郷哲郎(2006) ランドスケープ研究 69(5): 641-644.

#### 注釈

- 1 林業経済学会 2015年秋季大会にて報告。  
(2016年11月18日受付; 2017年2月9日受理)